長門構造帯西市地域と台地域から産出したペルム紀放散虫化石

Permian radiolarians from the Nishiichi and Dai areas of the Nagato Tectonic Zone, Southwest Japan

亀高 正男 [1]
Masao Kametaka[1]

[1] 産総研・地質情報
[1] Geol. Surv. Japan, AIST

長門構造帯は山口県西部を北北東-南南西に延びる構造帯で，北から三隅・台・西市・豊ヶ岳・小月の各地域に分かれて分布している．長門構造帯は，蛇紋岩・結晶片岩・古生代堆積岩・中生代堆積岩・白亜紀貫入岩から構成されている．このうち古生代堆積岩は，豊東層群・台層群・東平野層に区分されている．長門構造帯からはこれまでに，台地域平野の東平野層の凝灰質泥岩から石炭紀後期の放散虫化石が，豊ヶ岳地域東長野東方の豊東層群の乳白色層状チャートからペルム紀前期の放散虫化石が報告されている（礒崎・田村，1989）．今回は，新たに長門構造帯の２地点からペルム紀放散虫化石が産出したので報告する．

１）西市地域添ヶ迫南方の緑色塊状チャートから放散虫化石と海綿骨針が産出した．このチャートは泥質混在岩中のブロックと考えられ，従来の区分（高橋ほか，1968）では豊東層群に属している．チャートは破砕を受け角礫化しているが，放散虫化石の保存状態は良好である．得られた放散虫化石には Pseudotormentus kamigoriensis，Raciditor gracilis，Raciditor inflata，Kimagior manica などが含まれる．これらの放散虫化石はペルム紀中期から後期にかけて広く産出する．より詳細に年代決定をすることができる Albaillellaria は今のところ見つかっていない．海綿骨針は monaxon が最も多く，triaxon や tetraxon が伴われ，わずかながら rhax も含まれている．チャートの岩相や構成する化石種からみて，秋吉帯のペルム紀中期のチャートに対比される可能性が高い．豊東層群は秋吉帯の砕屑岩相に対比されると考えられており（礒崎・田村，1989），今回の結果はこれを支持している．

２）台地域久下の泥岩から保存状態の悪い放散虫化石が海綿骨針と共に産出した．この泥岩は，従来の区分（高橋・木村，1965）では台層群久下層と台層の境界付近に位置している．久下周辺の台層群は破断した砂岩泥岩互層を主体とし，チャートなどの外来岩塊は含まれていない．得られた放散虫化石群集には Albaillella sinuata が多く含まれ，Pseudotormentus kamigoriensis などが伴われている．これらの放散虫化石の示す年代はペルム紀前期の後期と考えられる．一般に秋吉帯の泥岩の年代はペルム紀中期の後期から後期の最前期であり，今回の試料は明らかにこれよりも古い年代を示している．従って，久下周辺の台層群は秋吉帯には対比されず，舞鶴帯ないし飛騨外縁帯に対比される可能性が高い．